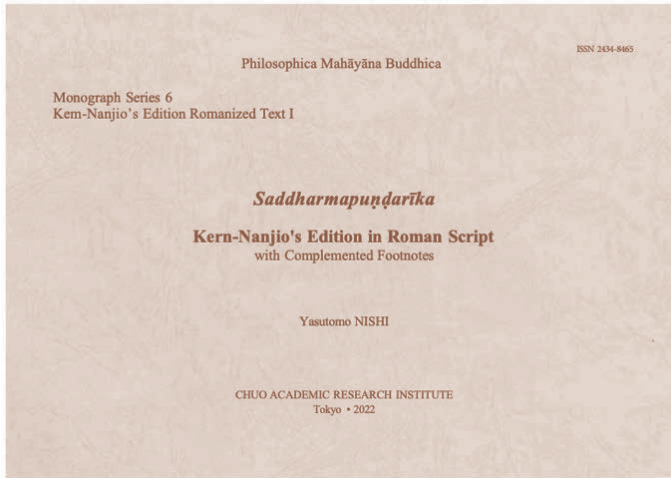
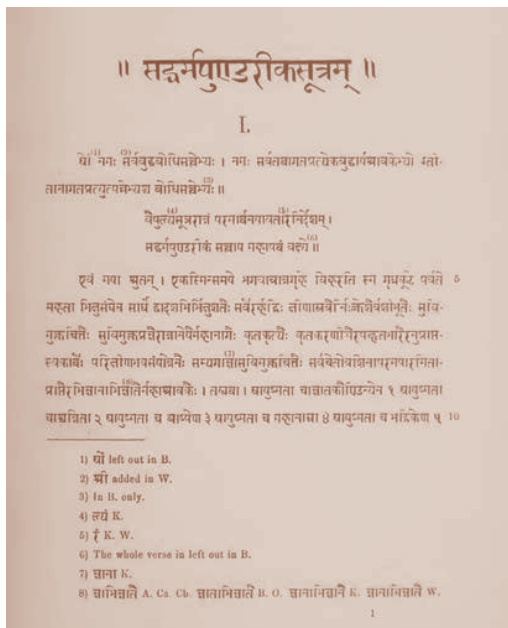


Philosophica Mahāyāna Buddhica Monograph Series 第6号を発売



このたび、学術研究室の西康友主幹による *Philosophica Mahāyāna Buddhica Monograph Series* (大乘仏典思想叢書) 第6号が発刊された。本書は、JSPS科学研究費補助金(科研費)JP21K00058の研究課題「梵文法華経諸問題解明のための基盤テキスト構築－『ケルン南條本』校訂へ向けて」の助成を受けた関連研究の最も主要な成果で、梵文法華経研究における標準・基準テキストに位置付けられている『ケルン・南條本』の脚注を補完したものである。

『ケルン・南條本』(下図は『ケルン・南條本』の一頁目)は複数の写本を用いて編纂された初の梵文法華経校訂本である。ケルン(Johan Hendrik Caspar Kern, 1833-1917年)と南條文雄(1849-1927年)により1908



－1912年の間に5分冊として出版されたが、編纂・校訂方法には以下の問題がある。

- (1) 写本の伝承・書写年代・出土地域を区別せずに、複数の写本を混合して編纂している。
- (2) 写本を校合する際に、どの写本からどのような理由で写本にある語を本文に採用したかの基準が不明である。
- (3) 写本間で読みの異なる語(異読)が正確に示されていないなど、脚注の不備が多い。

『ケルン・南條本』が梵文法華経研究における標準・基準テキスト

であることや、『ケルン・南條本』を典拠とする従来の研究を検証する際の利便性を考慮し、『ケルン・南條本』本文の校訂に向けたこの脚注の補完をする必要性から、本書の刊行に至った。

本書の刊行の準備として、まず『ケルン・南條本』が用いている8種類の梵文法華経写本における厳密な言語学的分析が必要である。『ケルン・南條本』では全27章490ページ、約44万5千語で構成され、『ケルン・南條本』が用いた梵文法華経写本すべての言語学的分析には膨大な作業が必要となる。この言語学的分析を効率よく行なうために、研究協力者(黛千洋・中央学術研究所特別研究員)と協働して、言語学研究と情報工学を応用したPC上での言語解析プログラムツールを開発し、以下の学際的な研究手法で、本書についての関連研究を推進させている：①解析ツールの開発と更新、②梵文法華経写本ローマ字本の電子化テキスト作成、③梵文法華経写本をローマ字化した語彙・偈文索引と韻律解析、④梵文法華経写本における並行・類似偈文句の探索など。

本書は『ケルン・南條本』が用いた複数の梵文法華経写本の読みを可能な限り尊重して、これらの異読すべてについて『ケルン・南條本』本文をローマ字化したテキストに集約させている(右上の図は左の図にある『ケルン・南條本』の一頁目に相当する本書の凡例)。

これにより、『ケルン・南條本』が用いた梵文法華経写本についての総合的な言語学的分析を明確化でき、これまで煩雑であった『ケルン・南條本』が用いた梵文法華経写本における異読等を容易に見出すことができる。本研究の成果は、従来から指摘されてきた『ケ

|| saddharmapuṇḍarīkasūtram ||

I.

om⁽¹⁾ namaḥ ⁽²⁾sarvabuddhabodhisattvebhyā | namaḥ sarvatathāgatapratyekabuddhāryasrāvakebhyo¹ 'trī-
tānāgatapratyutpannebhyas ca bodhisattvebhyā⁽³⁾ |
vāpulya⁽⁴⁾ 'ūtararājām paramārthamayāvātirā⁽⁵⁾ nīrdeśam |
saddharmapuṇḍarīkaṃ⁶ sattvīya mahāpūṭham⁷ vakye⁸ |⁽⁶⁾
5 evam⁹ mayā śrutam | ekasmin¹⁰ samaye¹¹ bhagavān rājagṛhe¹² viharati sma grāhṛakte¹³ parvate¹⁴
mahāt bhūksusamghena sārddham¹⁵ dvīdāsabbir bhūksusātā¹⁶ sarvair¹⁷ arhadbhīḥ kṣōṣravair¹⁸ nīkḷekair¹⁹ vaśībhitū²⁰ suvi-
muktacittā²¹ suvimuktasprajñair²² ajāneyair²³ mahānāgāḥ kṛtakṛyāḥ kṛtakaraḥ²⁴ apahṭabbhāir anuprāpta-
svakīrtihā²⁵ parīkṣābhavasampyojanāḥ samyagjñair²⁶ suvimuktacittāḥ sarvacetovasīṭṭiparamapāramitā-
pūṭṭair²⁷ abhijñānābhijñair mahāśrāvakā²⁸ | tad yathā | āyasmatā²⁹ cājñitakauṇḍīyama³⁰ | āyasmatā
10 cāvajjitā³¹ 2 āyasmatā ca bhāṣeṇa 3 āyasmatā ca mahānīrmitā 4 āyasmatā ca bhadrīkeṇa³² 5

KN note (A, B, Ca, Cb, R, W, O, P): (1) om left out in B. (2) not added in W. (3) In B, only. (4) from K. (5) from K, W. (6) The whole verse in left out in B.
(7) added K. (8) added in A, Ca, Cb. jāññitā in B, O. jāññitā in K. jāññitā in W.
Corrected note (B=Ca, B, C=Ca, C=Cb, T=K, O): (1) B(T), S(MSR), O (none). (2) T=ir. Except KN, satva- in all satva-. Same as below. (3) Only in B.
(4) T(SMSR, SG) 'vamp. (5) R, B 'saddharm; C4(T), SG '***'yastatā***; T= 'saddharm; nīrdeśam. (6) B, O (none). (7) R, T= 'saddharm; B 'sattvīyakaḥ.
(8) R abhijñānābhijñair; B abhijñānābhijñair; C4 abhijñānābhijñair; C5 ***; O abhijñānābhijñair.
Another variant reading: 1 B 'saddhāryasrāvakebhyo. 2 R saddharmapuṇḍarīkaḥ; B, O (none); C4 '***'mpuṇḍarīka***; C5 ***. 3 B, O (none); C4 mahāpūṭha; C5 ***. 4
B, O (none); C4(T), SG vakyā; C4(SMSR) vakyā. 5 C4 evam; C5 ***. 6 O ekasmin. 7 T= samaya. 8 O(T) rājagṛhe. 9 R, C4, T= grāhṛakte; O(T) grāhṛakte.
10 R parvate. 11 R, B, T= śrūtam; C4 śrūtam; C5 ***. 12 O mahānāgāḥ; B (none). 13 R sarvair. 14 C4 kṣōṣarā; C5 ***; T(K) kṣōṣarā; O(T) kṣōṣarā.
15 O(SMSR) kṣōṣarā; . 16 R, T= sārddham; O sārddham. 17 R, T= 'sarvair. 18 R, T= āyasmatā. 19 O kṣōṣarā; . 20 T(SG) anuprāpta-
svakīrtihā; O anuprāpta-
svakīrtihā. 21 R sarvacetovasīṭṭiparamapāramitā; B, T= sarvacetovasīṭṭiparamapāramitā; C4 sarvacetovasīṭṭiparamapāramitā; C5
***. 22 R mahaśrāvakā; C4 mahāśrāvakā; C5 ***; O mahāśrāvakā; . 23 O āyasmatā. 24 O āyasmatā; . 25 R cāvajjitā; B
cāvajjitā; T= rājagṛhe; O cāvajjitā. 26 sandhikā.

章の『ケルン・南條本』における脚注の補完を本叢書から刊行予定である。

なお、弊研究所では、本叢書のより広い活用を願い、インターネット上に公開 (<https://www.cari-saddharmapuṇḍarīka.com/philosophica>) している。本叢書を多くの研究者に提供することで、仏教經典に横たわる諸問題解決に資する一助となれば幸いである。今後も、法華經成立・伝承過程の解明に基づいた法華思想研究に向けて、新しい視座を獲得できる一つの可能性を見出すような研究を推進できればと願っている。

『ケルン・南條本』の編集・校訂上の問題（1）－（3）が解消でき、梵文法華經などの仏典研究において学術的に信頼できる基盤テキストとなることが期待される。

本書は梵文法華經における第1－3章部分の第一分冊で、今後の4年間で梵文法華經全

提供することで、仏教經典に横たわる諸問題解決に資する一助となれば幸いである。今後も、法華經成立・伝承過程の解明に基づいた法華思想研究に向けて、新しい視座を獲得できる一つの可能性を見出すような研究を推進できればと願っている。